けんこう横丁 ―――― 第52回

保健センターだより

「ライフセービング」から学んだこと

保健センター所長　吉村　豊

昨年８月、千葉･富浦で理工学部集中講義「ライフセービング」を開講中、二日目の午後に事故が起き、幸運にも一人の幼い命が救われました。「命の尊さ」と「今を生きることの大切さ」を知って頂くためにこの事故を紹介します。

これから海に入ろうとした時、波打ち際で女の子を抱きかかえながら「誰か助けてください」と女性が大声で叫んでいました。小峯・森両先生が急いで駆け寄りました。少女の腕がだらりと垂れ下っているのが見え事の重大さに気づきました。先生たちが人工呼吸と心臓マッサージを始めたので、この浜のライフセーバーを探しに行き事情を説明しました。現場に戻ると、先生たちが懸命に「大丈夫だよ」と声をかけながら、力強く少女の手を握っていました。現場の状況をライフセーバーに説明する間、代わりに少女の手を握り、その後、少女の友達が心配しながら怯えていましたので「助かるから大丈夫だよ」と声をかけました。救急車が来るまでかなりの時間があったと思います。少女の友達と共に現場を離れ仲間たちの所に戻りました。周りの人たちと協力している間、とても怖く、ずっと慌てていました。また、少女に何もしてあげられないので逃げ出したいと思いました。先生たちが真剣に少女を救助している姿はとても逞しく感じました。あの時少しでも遅れていたら、少女は助からなかったと思います。その日の夕方、先生に病院から容態が回復したとの一報が入ると皆から歓声が上がり、先生たちから「ありがとう」と言われました。今回の経験を通して、人を思いやる気持ちの大切さを痛感しました(履修学生)。

事故詳細：平成18年８月５日、午後２時32分、富浦海岸にて小学一年の女の子が溺水し、水没から引き上げられたその状況は、ＣＰＡ(意識なし 呼吸停止 心停止)状態にて救急蘇生(ＣＰＲ)開始。ＣＰＲ開始５分後に心拍再開。その後、自発呼吸も再開した。１５分後、意識混濁状態と同時に「こわかった・・」と小さな声でつぶやいた。バイタルサインをチェックしながらＡＣＬＳ(二次救命)へ。午後６時半、搬送された亀田病院救急救命センター(鴨川)から、児童の教諭より容態回復と父親の感謝の一報が入る。肺水腫、及び肺炎などの併発を恐れるため、２４時間の予後管理に入った(小峯力)。

この出来事は８月６日の読売新聞地方版、㈶東京救急協会応急手当情報誌「てあて」42号に掲載されました。「ライフセービング」担当の小峯力先生は日本ライフセービング協会理事長・流通経済大学助教授、森洋行先生は東京健康科学専門学校専任講師をされています。先生方は以前、溺れた人を助けられなかった思いがその後の生き方に強く影響を与えたとお聞きしています。

保健センターでは危機管理の一環としてAEDを学内に配し、教職員に対して講習会を開催し、セイフティ・キャンパスを目指しています。

卒業生の皆さん、どうぞ感謝の気持ちと使命感を持って人生を歩んで下さい。